

栗原 様

北山今小路遺跡 I

福岡県八女郡立花町大字北山所在遺跡の調査概要

立花町文化財調査報告書

第6集

1993

立花町教育委員会

きたやまいまこう じ
北山今小路遺跡 I

たちばなまち
立花町文化財調査報告書

第6集

1993

立花町教育委員会



北山今小路遺跡Ⅰ区



北山今小路遺跡Ⅱ区

序

ここに報告する北山今小路遺跡は、平成4年度立花北部地区県営ほ場整備事業に伴い、平成4年7月から発掘調査を開始し、一応の調査を終えて中間報告書として作成したものです。

この地区は、矢部川南岸沿いの自然堤防上段に位置することもあり、いろんな時代にわたって多数の住居跡が確認されました。

本町では、このような集落跡の大規模な調査は初めてということもあり、町当局、地権者の方々のご理解とご協力によって本調査が実現できましたことは、誠にありがたいことであります。

この調査によって、遠い昔、縄文時代や古墳時代、そして中世においても、私たちの先祖は、その時代にふさわしい住環境でさまざまな生活を営んでいたことをうかがい知ることができます。

これを機に、町民の方々が、本町の埋蔵文化財に対して一層関心を持たれ、これらを愛護していただくことを念じる次第です。

最後になりましたが、発掘調査にあたりまして、南筑後教育事務所の伊崎先生はじめ、発掘作業に携わっていただきました多くの方々のご指導、ご協力にたいしまして、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月31日

立花町教育委員会

教育長 末 継 敬一郎

凡例

1. 本書は、立花町が平成4年度に国・県の補助金を得て発掘調査を行った北山今小路遺跡^{きたやまいまこうじ}の概要報告であって、立花町文化財調査報告書の第6集にあたる。
2. 発掘調査は立花町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁文化課および南筑後教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 調査中の遺構の実測は、馬場登喜子・鵜木栄子・鵜木洋子・梅野孝子・秋山幸子・清原ヤヨイ・野中栄子・中川寿賀子・小池史哲・伊崎俊秋が、写真撮影は小池・伊崎が行った。
4. 出土遺物の実測は伊崎が行い、写真は北岡伸一と伊崎が撮影した。
5. 遺構・遺物の図面の浄書は豊福弥生・原カヨ子・伊崎が行った。
6. 挿図における方位は磁北である。
7. 本書は伊崎が執筆・編集した。

目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の概要	6
IV. おわりに	12

I. はじめに

立花町における県営圃場整備事業・立花北部地区が始まったのは平成元年度（1989）からである。圃場整備事業に関わる埋蔵文化財の協議と試掘等は事業実施前年度に行っているが、この立花北部の平成4年度分については、3年度の秋に試掘を行って遺構が存することを確認していた。平成4年度になってビニールハウス等の撤去・移転がなかなか進まず発掘調査に入るのが遅れ気味であったが、7月下旬から調査を開始し、年末まで実施した。

調査期間：平成4年（1992）7月28日～12月28日

調査面積：約6,620㎡

調査の関係者は次のとおりである。

立花町教育委員会	教 育 長	末 継 敬一郎
	社会教育課	課長 武 田 行 夫
		係長 山 田 学
		主査 中 尾 八重子
		主任主事 平 島 隆 夫

福岡県教育庁文化課文化財保護室調査班	技術主査 小 池 史 哲
福岡県教育庁南筑後教育事務所社会教育課	技術主査 伊 崎 俊 秋

調査においては、佐々木四十臣・久賀愛策（福岡県文化財保護指導委員）、西健一郎（九州大学文学部）、赤崎敏男・大塚恵治・中川寿賀子（八女市教育委員会）、田中康信（瀬高町教育委員会）の各氏には種々のご指導ご援助を受けた。深謝いたします。

[発掘調査従事者]

野中 良介・甲木 行雄・由布 豊昭・井上 幸雄・浅田 牧男・金子 正義・石橋 輝正・大城 治一・小川 忠郷・松尾 東・鶴 港・鶴木 栄子・鶴木 洋子・清原ヤヨイ・秋山 幸子・鶴木ヤス子・近見クニエ・鶴木 絹子・由布 芳子・野中 栄子・梅野 孝子・原 美智子・平 和美・原 初子・中原恵美子・岡 レイ子・梶島ハルエ・大城 千秋・小柳テルヨ・加藤カズエ・徳永ユキエ・切明和子

II. 遺跡の位置と環境

(所在地)

福岡県^{や め}八女郡^{たちばなまち}立花町^{きたやま}大字^{いまこうじ}北山字今小路

遺跡は有明海に注ぐ矢部川の中流左岸で、白木川が合流する所の東側、県道玉名八女線の西側にある。ここは矢部川が氾濫を繰り返す中で形成した自然堤防の上であり、標高22m前後を測る。当該地の南には筑肥山地からのびてきた丘陵がすぐ近くにまで迫っていて、後背地はあまり広いとはいえない。

この今小路遺跡で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期、弥生時代中～後期、古墳時代初頭、5～6世紀、中世という多岐にわたるものであったが、それと関連のある遺跡をこの周辺で拾い上げるとすればかなりの数になるので、今はそのいくつかを取り上げておこう。

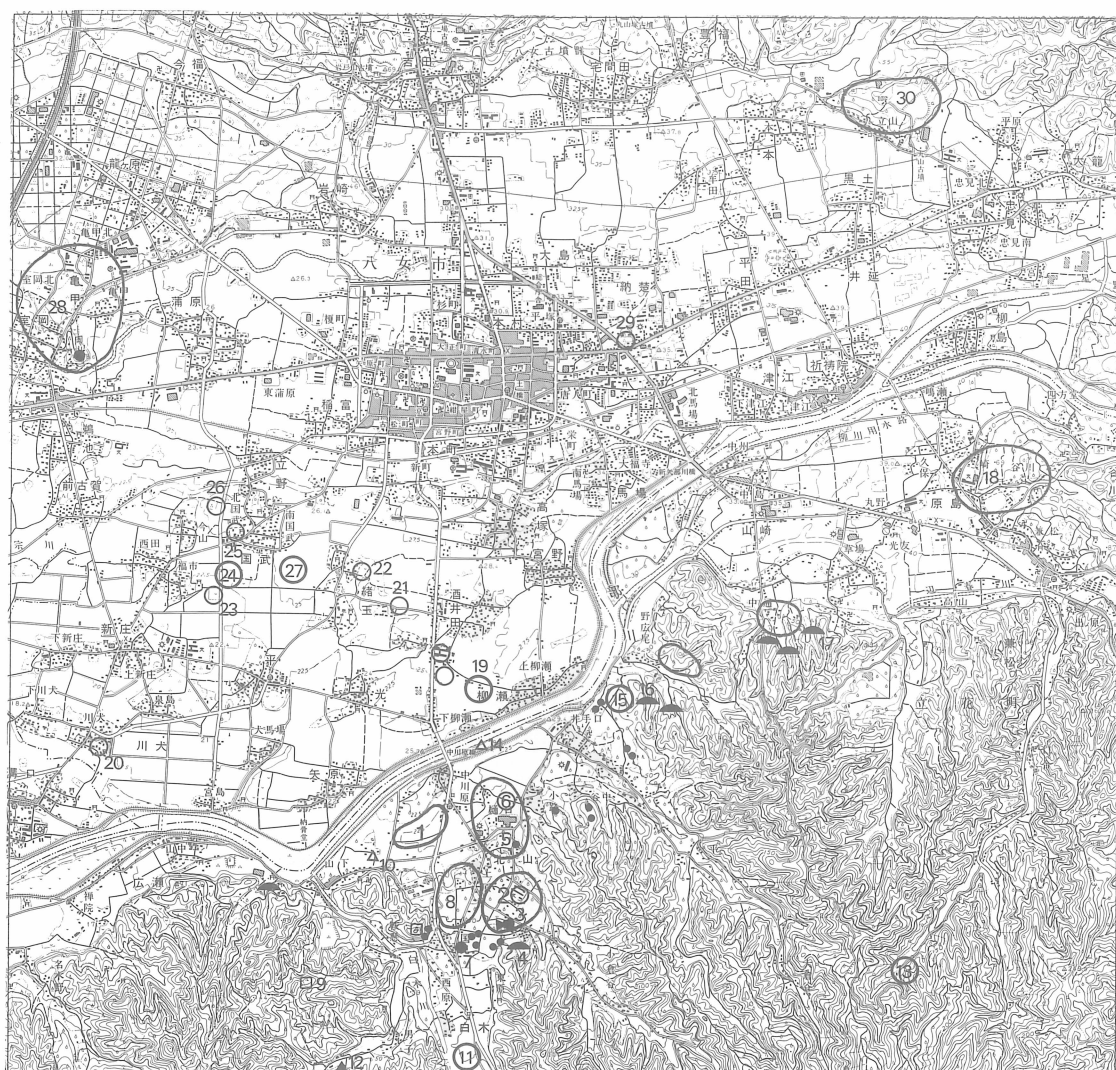
八女市アモメ遺跡^(註1)はいろんな時代の遺構が検出された中に、縄文後期の住居跡が20数軒あったことと、弥生前期の彩文土器が出土したのは注意される。

立花町曲松遺跡^(註2)は弥生後期の甕棺墓が26基検出されている。同辻遺跡^(註3)はやはり矢部川左岸に位置し、この今小路遺跡の遺跡立地を考えるうえで参考になる。八女市中里遺跡^(註4)の弥生後期とされる前方後方形周溝遺構^(註5)、深田遺跡の古墳初頭の居館跡も注目される。

遺跡の南方には戦国時代の永禄年間に蒲池鑑廣が築き、のち筑紫広門が入城していたという山下城跡^(註6)がある。また、開窯の時期ははっきりしないが陶器・磁器を焼いていた男ノ子焼窯跡^(註7)もある。すぐ近くの山下には慶長6（1601）年に筑後全土を領有した田中吉政が作らせたという四里石^(註6)（立花町指定文化財）がある。

註

1. 八女市教育委員会が1992～1993年に調査した。
2. 立花町教育委員会『曲松遺跡』 立花町文化財調査報告書 第2集 1985
3. 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）』 1980
4. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報』 八女市文化財調査報告書 第18集 1989
5. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報3』 八女市文化財調査報告書 第23集 1992
6. 立花町教育委員会『立花町の文化財』 1989
7. 浅野陽吉『筑後陶甕考』 1944



- | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 北山今小路遺跡 | 6. 北山清浄田遺跡 | 11. 白木西原遺跡 | 16. 稲荷山横穴群 | 21. 深田遺跡 | 26. 篠原遺跡 |
| 2. 北山小学校遺跡 | 7. 大塚古墳 | 12. 男ノ子焼窯跡 | 17. 鬼隈横穴群 | 22. 池上遺跡 | 27. 前田遺跡 |
| 3. 茶臼塚古墳 | 8. 上ノ原遺跡 | 13. 西谷遺跡 | 18. 辻遺跡 | 23. 中里遺跡 | 28. 室岡遺跡群 |
| 4. 小倉谷横穴群 | 9. 山下城跡 | 14. 千間土居 | 19. アモメ遺跡 | 24. 大坪・前田遺跡 | 29. 赤氏遺跡 |
| 5. 今出坂古墳 | 10. 四里石 | 15. 曲松遺跡 | 20. 川犬古墳群 | 25. 松本遺跡 | 30. 立山山遺跡 |

Fig. 1 立花町周辺遺跡分布図 (1/50,000)

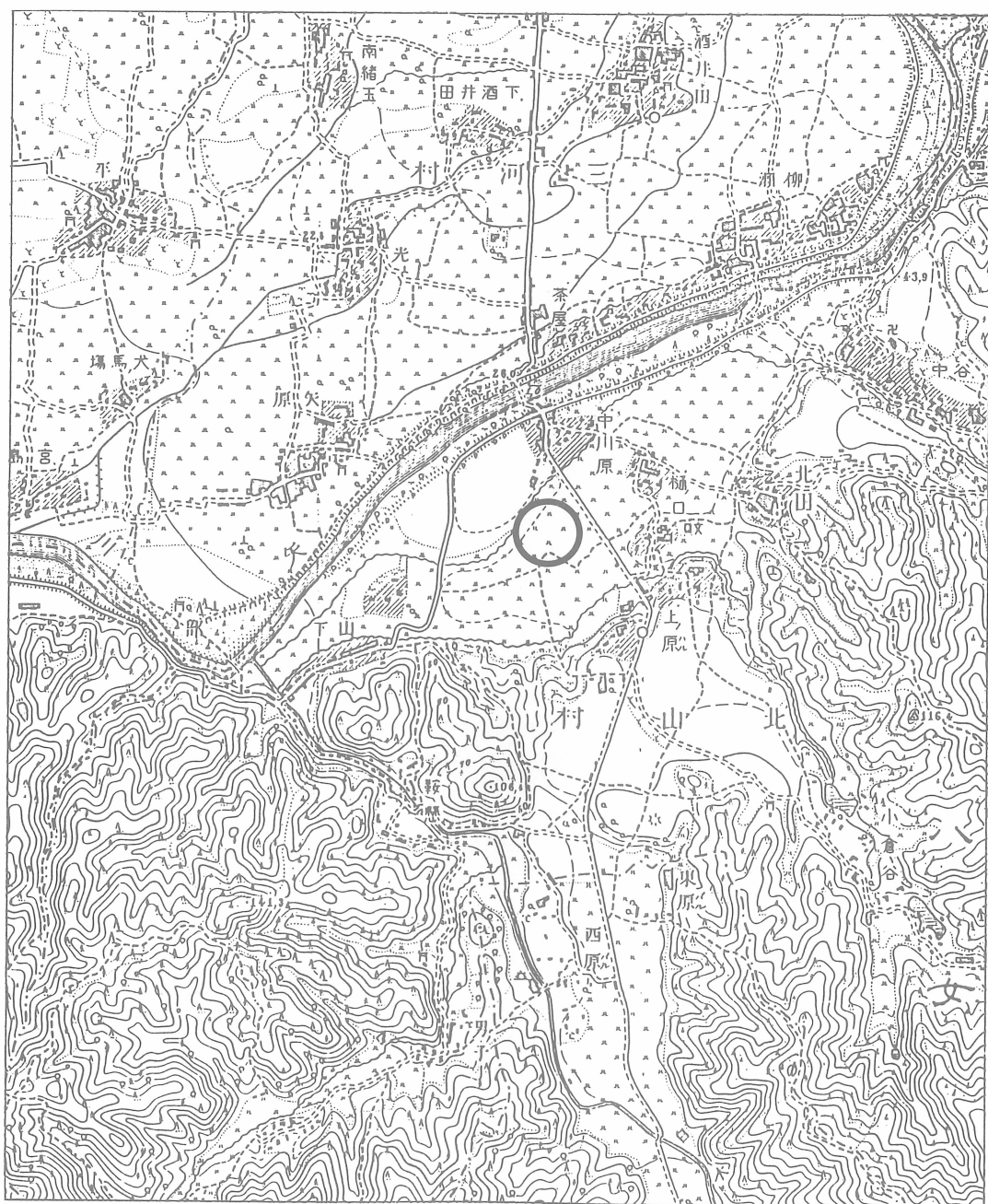


Fig. 2 北山今小路遺跡位置図 (1/20,000, 明治3年)



Photo. 1 山下の四里石



Photo. 2 山下城跡



Photo. 3 男ノ子焼窯跡

III. 調査の概要

調査はⅠ区とⅡ区とに分けて行った。検出された遺構の図面関係や遺物も未整理の段階にあるので、いまはその内容について十分に述べられない。時期に関係なく付した遺構番号は次のとおりであった。これは正式の整理を経ていく中で若干の増減があるだろう。以下には現時点で把握していることを時代ごとに列記しておこう。

・ 竪穴住居跡	211
・ 掘立柱建物跡 (SB)	2
・ 土壇 (SK)	85
・ 溝 (SD)	9
・ 縄文時代甕棺 (JK)	2
・ 甕棺墓 (K)	6
・ 木棺墓・土壇墓 (D)	3
・ ピット (P)	多数〈遺物の出土したものは284個〉

◎ 縄文時代晩期

Ⅱ区において小児用と思われる甕棺2基 (Fig. 8) と、その近くで遺物包含層が認められた。住居跡も存するのかわからないが明確ではなかった。Ⅰ区でも遺物のみがみられた。土器のほかに打製石斧・磨製石斧・打製石鏃などが出土している。

◎ 弥生時代中期

この時期は数軒の長方形プランの竪穴住居跡がみられたのみである。

◎ 弥生時代後期～古墳時代初頭

この遺跡の主体をなす時期である。多数の竪穴住居跡と土壇・溝、甕棺墓・木棺墓、ピットなどが検出された。後期は中頃以降であり、終末を経て古墳時代初頭にかけてのものである。

竪穴住居跡はⅠ・Ⅱ区をあわせて211軒の番号を付したが、200軒に近い数がこの時期に属すると思われる。弥生後期の段階では平面形は長方形をなし、中央の炉をはさんで2本の主柱穴があって、ベッド状遺構を有する例も多い (Fig. 7)。焼失したと思われる住居もあった。古墳初頭になると方形もしくは長方形のプランとなって4本柱になるらしい。床面にベンガラが付着している例も多々あって、住居内においてベンガラを製造していたことを伺わせた。65号住居跡床面からは石杵とベンガラとが検出されている。

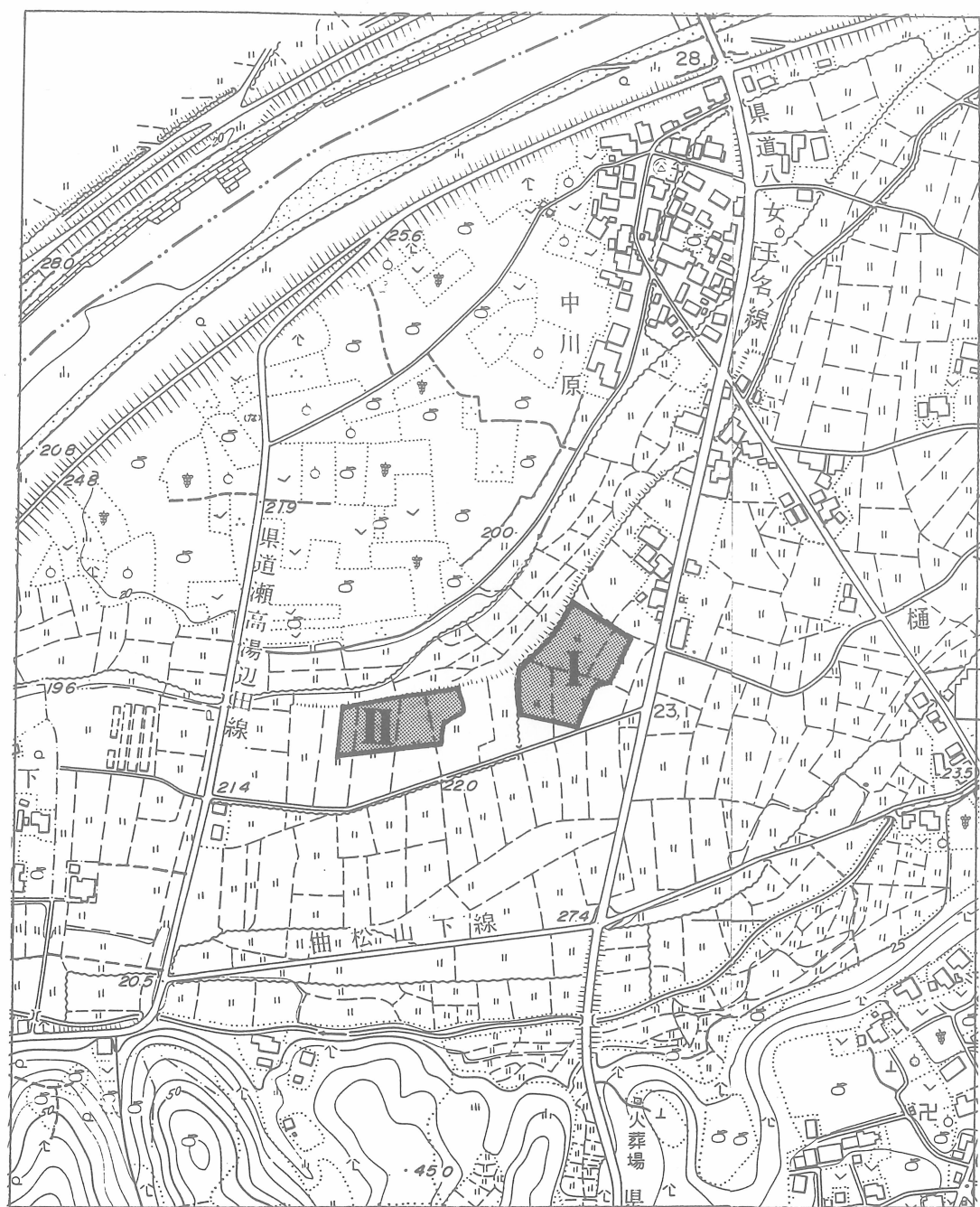


Fig. 3 北山今小路遺跡周辺地形図 (1/5,000)



Fig. 4 北山今小路遺跡遺構分布図

II区における溝（SD206・208）は削平された部分があるがL字状に巡っているようであり、ある時点で集落を区画する機能を持っていたと考えられる。この中から多量の土器と銅戈片が出土したことは注意される。

墓地はII区において狭い範囲内に営まれており、甕棺墓・木棺墓・土壙墓が合計9基検出されたのみである。調査区外にまだ広がる可能性もあるが、これらの墓は住居群とは重複していなかった。D3は横口式土壙墓であり、これの検出も注意されよう（Fig.8）。

出土遺物としては多量の土器のほか、石包丁・石鏃・砥石・石杵・石錘などの石器、投弾、青銅器（戈・鏃）、鉄器（鏃・鎌・斧など）があった（Fig.9・10）。

土器はII区の溝から最も多く出土し、波状文を持つ畿内系のものや、脚台の付く肥後系とされる甕などもある。またI区東北端部では、遺構は明確に捉え難かったが庄内式～布留式期の土器が多く出土した。今後の整理を経ればもっと詳しい知見が得られよう。

石包丁は30数点の出土をみたが、鉄器が普及したのちも石包丁のみは後期にまで残存するというこれまでの知見を再確認したこととなった。通常二孔を有するもののほかに無孔の資料があって、それらは刃部は形成されているものの本当に穂摘具としての機能を果たしていたのかどうか疑わしくさえある。また、瀬戸内系とみられる両端に抉りを入れたものが2点ある。これは今までは九州でも東海岸地方に多くの出土例が知られていたものであって、内陸部では新知見であった。なお、小豆色をしたいわゆる輝緑凝灰岩製のものも数点あって飯塚市立岩産とするべきか否か迷うところであるが、一方、他の資料は全て片岩系であるなかに未製品と思われるものもあって、集落内で製作していた可能性もある。

砥石の多いことには目を見張るものがある。大小含めて100点は越すだろう。この時期の砥石の用途としては鉄器を研ぐものとしか考えようがない。鉄器は50点前後しか出土していないが、かなりの鉄器の普及を伺わせるものである。

石杵が2点出土したことも特記すべきだろう。住居跡等から検出された赤色顔料は、視覚的にはベンガラのみであって水銀朱は見られないようである。調査中に明確に石皿と確認できたものはなかったが、見直してみればあるかもしれない。

銅戈も銅鏃も小破片であったが、その出土した意義は大きい。特に銅戈が破片として、集落を区画するであろう溝から廃棄された状態で検出されたことは、集落内におけるその用途の実態に迫る手がかりともなう。

◎ 古墳時代後期（5～6世紀）

竪穴住居跡が20軒前後と掘立柱建物跡・土壙がある。竪穴住居跡は4本柱でカマドを有するものが大半である。出土遺物としては土師器・須恵器・鉄器・勾玉などがあった。

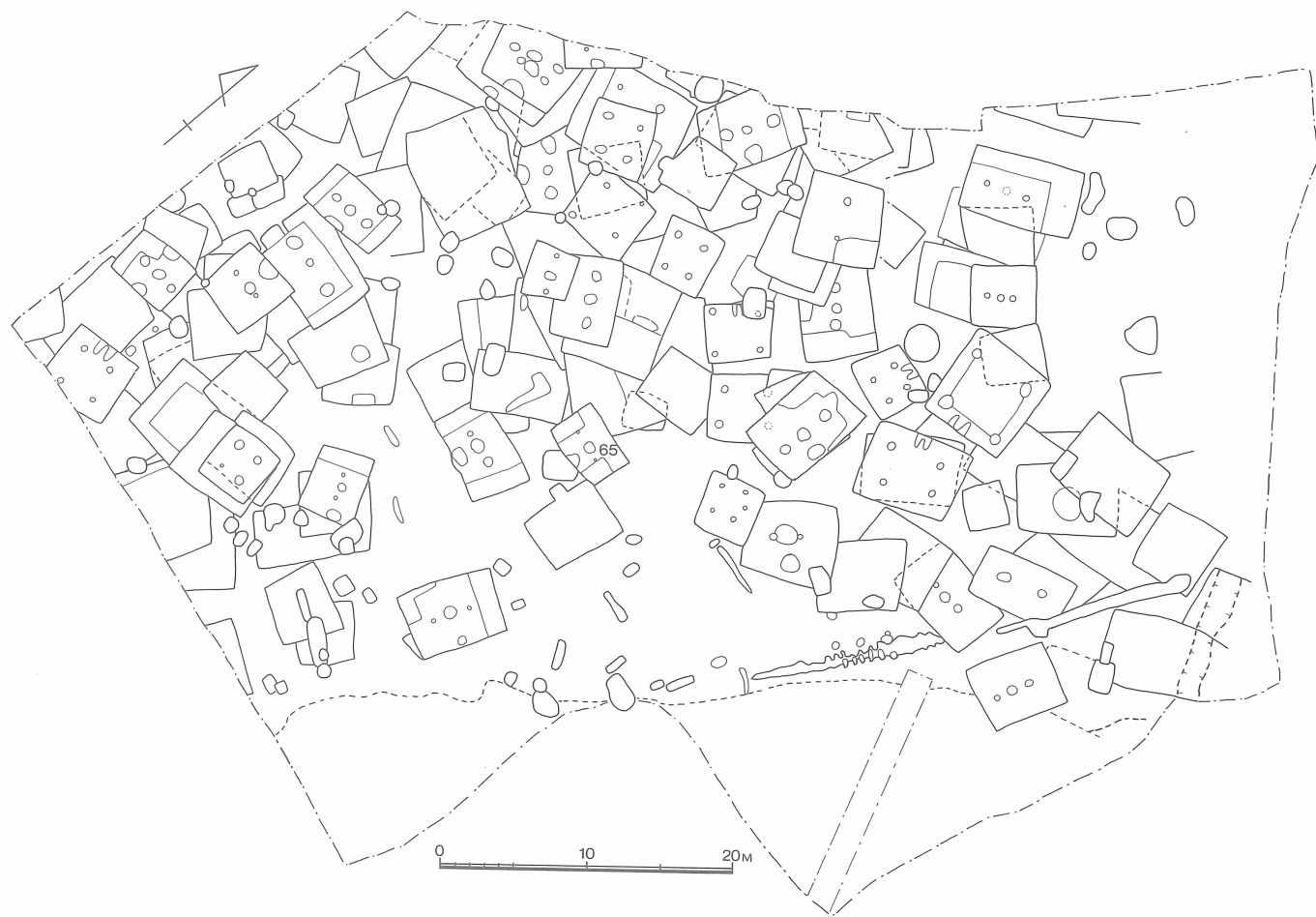


Fig. 5 I区全体図

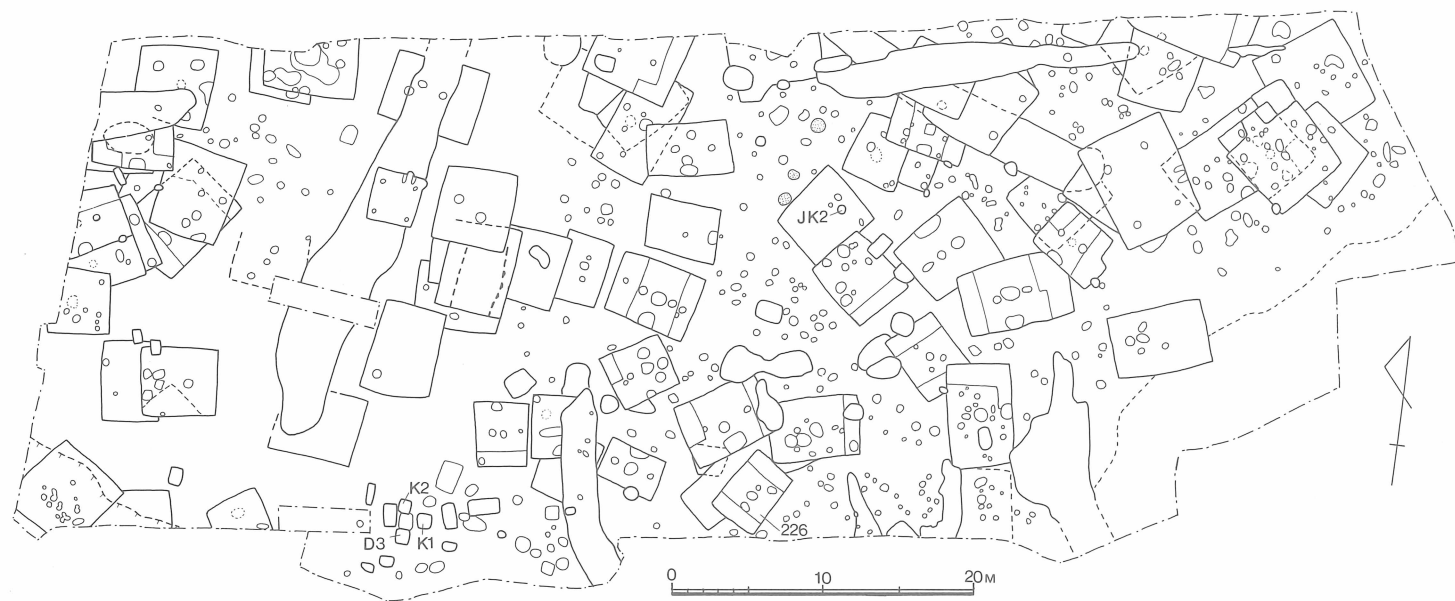


Fig. 6 II区全体図

◎ 中世 (14世紀頃)

Ⅱ区において、東西方向にはしる溝と、それと連続はしないが直行する溝が数条検出された。その溝の中から少量ながら土師器・滑石製石鍋・陶器・輸入陶磁器が出土しており、14世紀以降の所産であることがわかる。輸入陶磁のなかに1点ではあるが高麗青磁があったことは注意されよう。溝で区画された中は館跡であったのかも知れないが、建物跡等が未だ明確でない。当該地の南西方に存した山下城と無関係というわけでもなかろう。

IV. おわりに

北山今小路遺跡においてはいろいろな時代の遺構・遺物が検出されたが、最も注意すべきは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落であろう。調査区内だけで200軒近い竪穴住居跡が検出されているが、調査区外をも含めて考えればもう少し多かったはずである。Ⅰ区とⅡ区の間は試掘の段階で遺構がなかったというから、ここはのちの洪水等によって堤防が決壊して住居群が流されたとも捉えうる。ただ、両区ともにその南方は後背地が迫っていると思われるので、集落は自然堤防上に帯状に形成されていたと考えられ、そうすると住居跡が倍加するというほどのものではないだろう。

ある一時期にどれほどの住居が営まれていたかは今後の分析をまたねばならないが、稲作農耕を営みつつ青銅器を用いたマツリを行い、多くの鉄器を使用し、瀬戸内や肥後地方などとの広範囲の交流を伺わせる集落が矢部川南岸で検出されたことの意義はたいへんに大きいといわねばならない。対岸の八女市域に存する同時期の集落群との関係の分析も当然のことながら必要となってこよう。

折しも“倭国大乱”から邪馬台国の時代であり、佐賀県吉野ヶ里遺跡以来、甘木市平塚川添遺跡・福岡市雀居遺跡など衆目を引きつける発見があいついでいるが、この北山今小路遺跡も同じ時代に八女地方に存したであろう「クニ」の一部であったことと思われる。

他の時代に関しても重要な成果が多々得られているが、それらも含めて全て整理が済んだ段階でないと言及しえない。

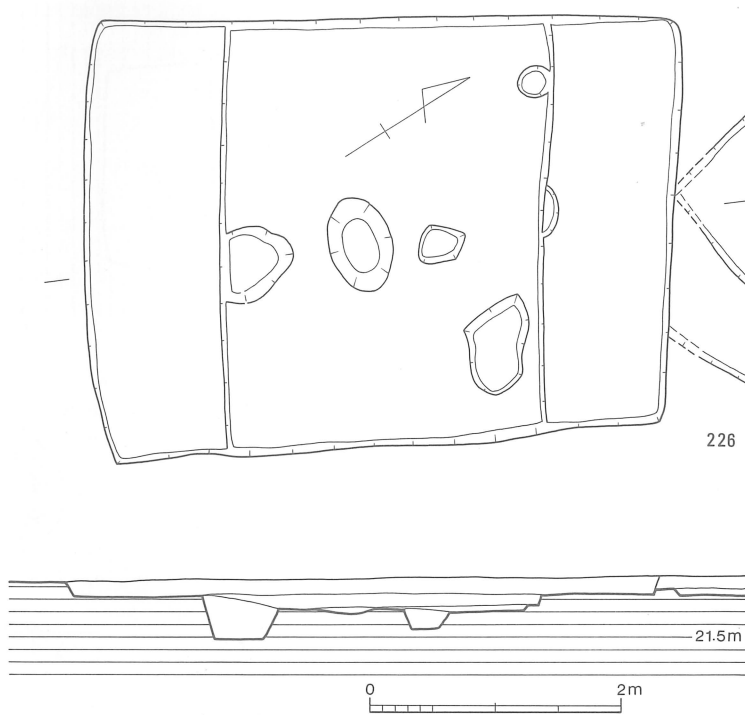
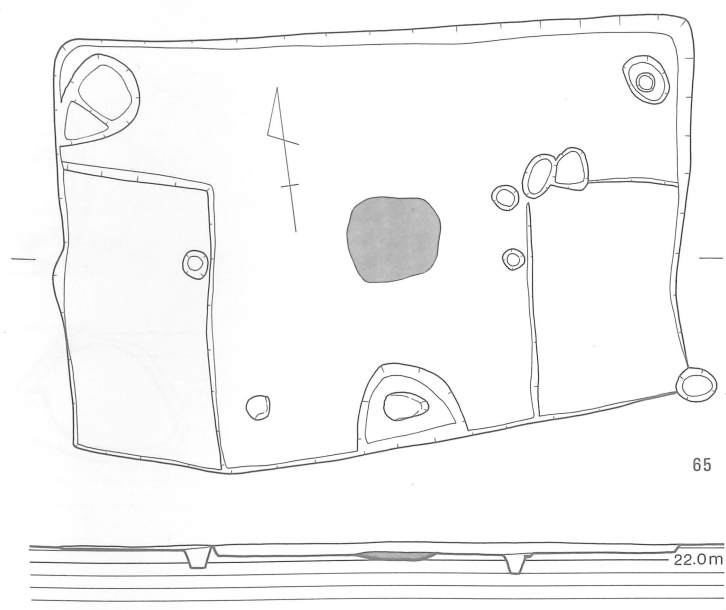


Fig. 7 65・226号住居跡実測図 (1/60)

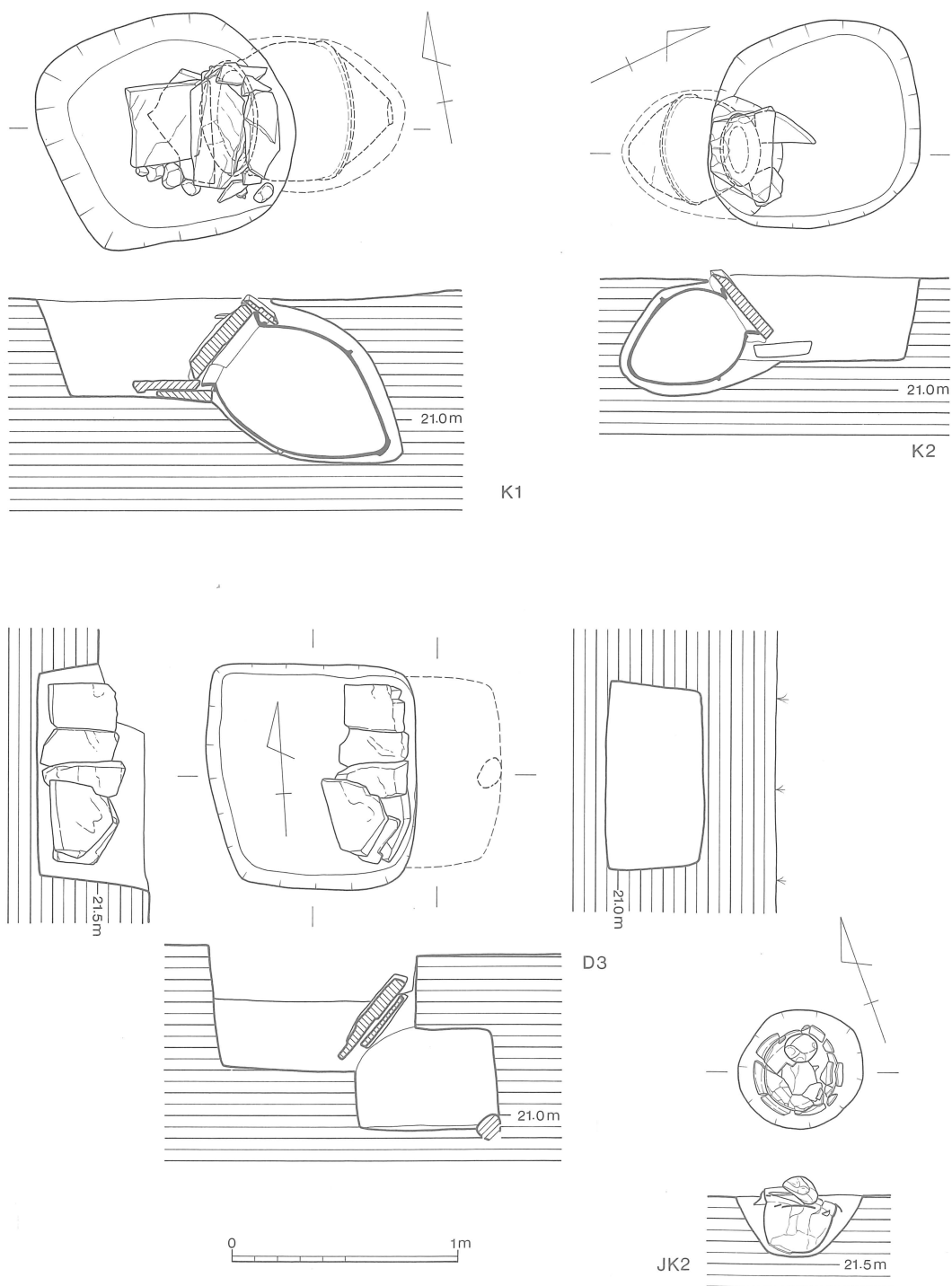


Fig. 8 甕棺墓・土墳墓実測図 (1/30)

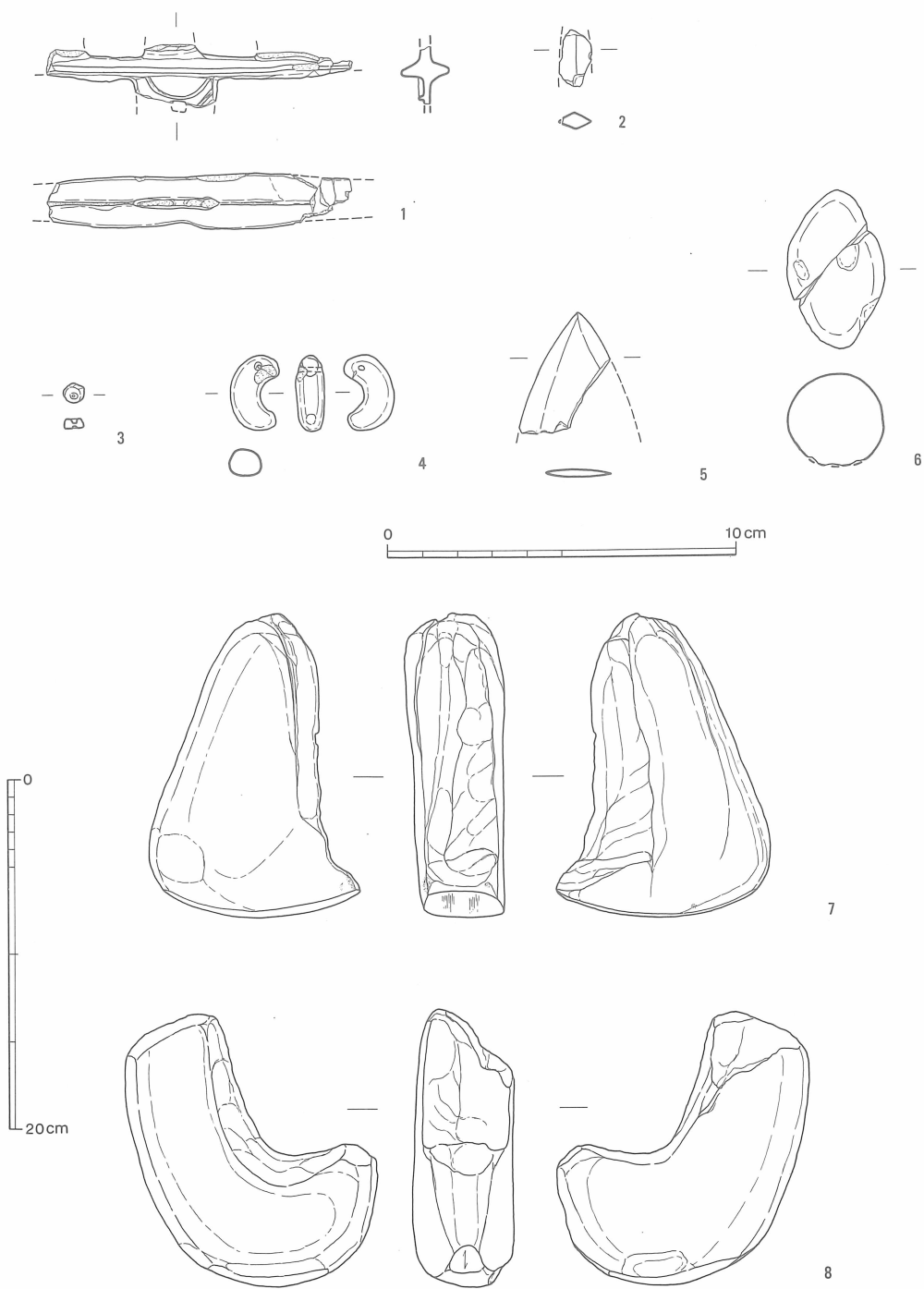


Fig. 9 北山今小路遺跡出土遺物実測図1 (1/2・1/4)

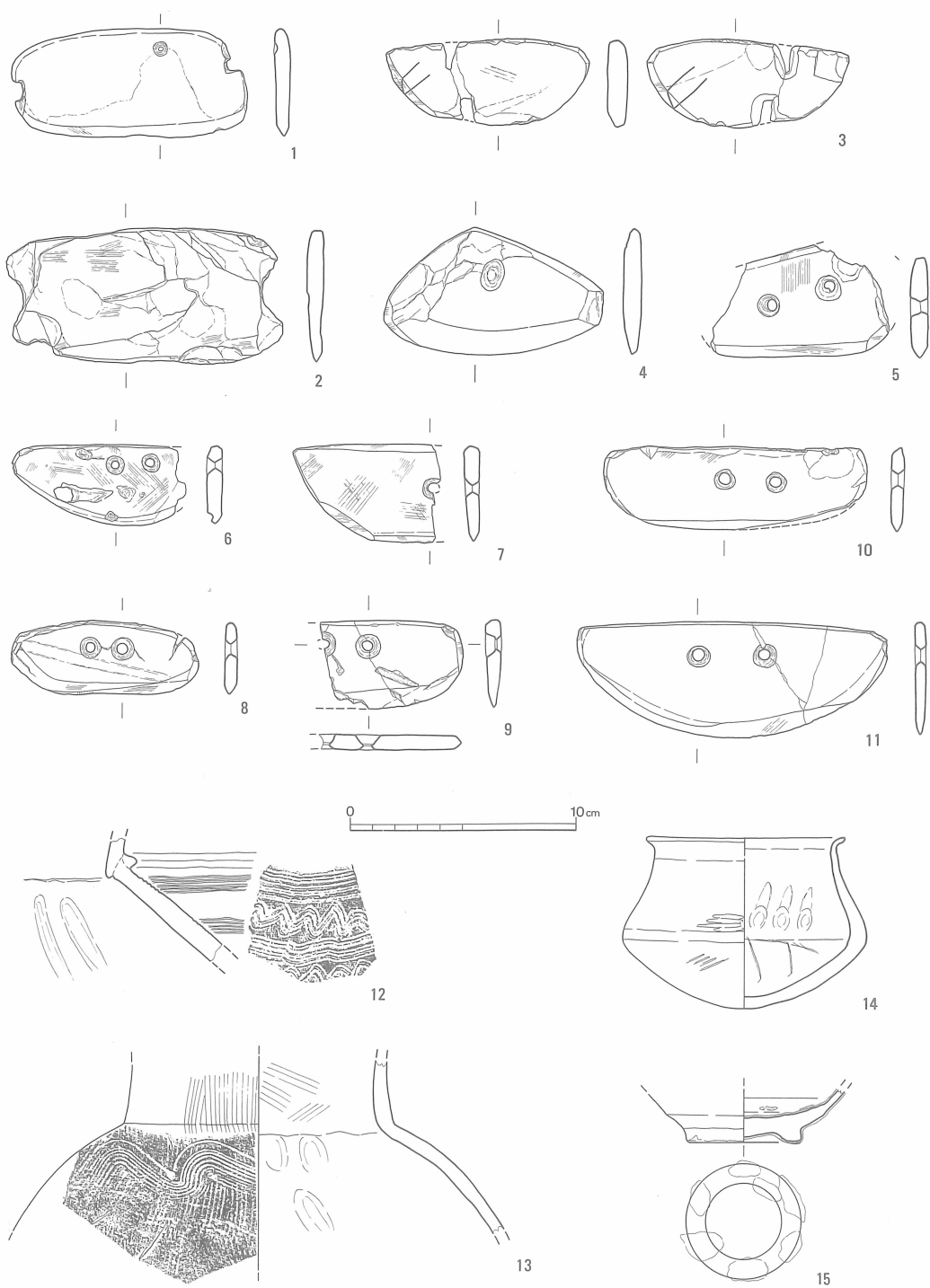


Fig.10 北山今小路遺跡出土遺物実測図 2 (1/3)

PLATE



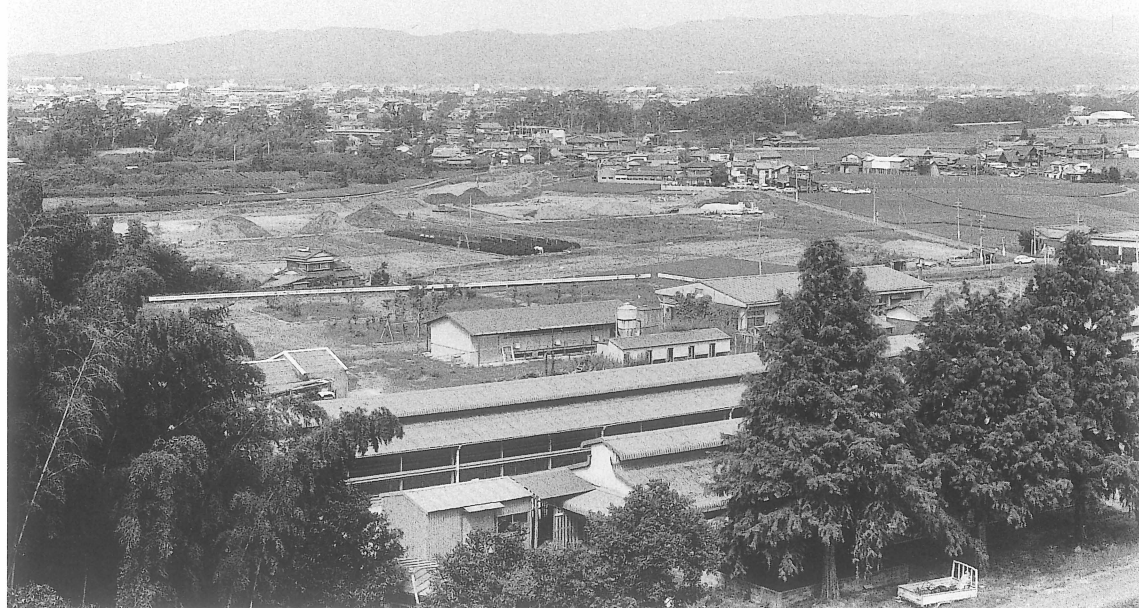
北山今小路遺跡全景（東から）



I区全景
(南から)



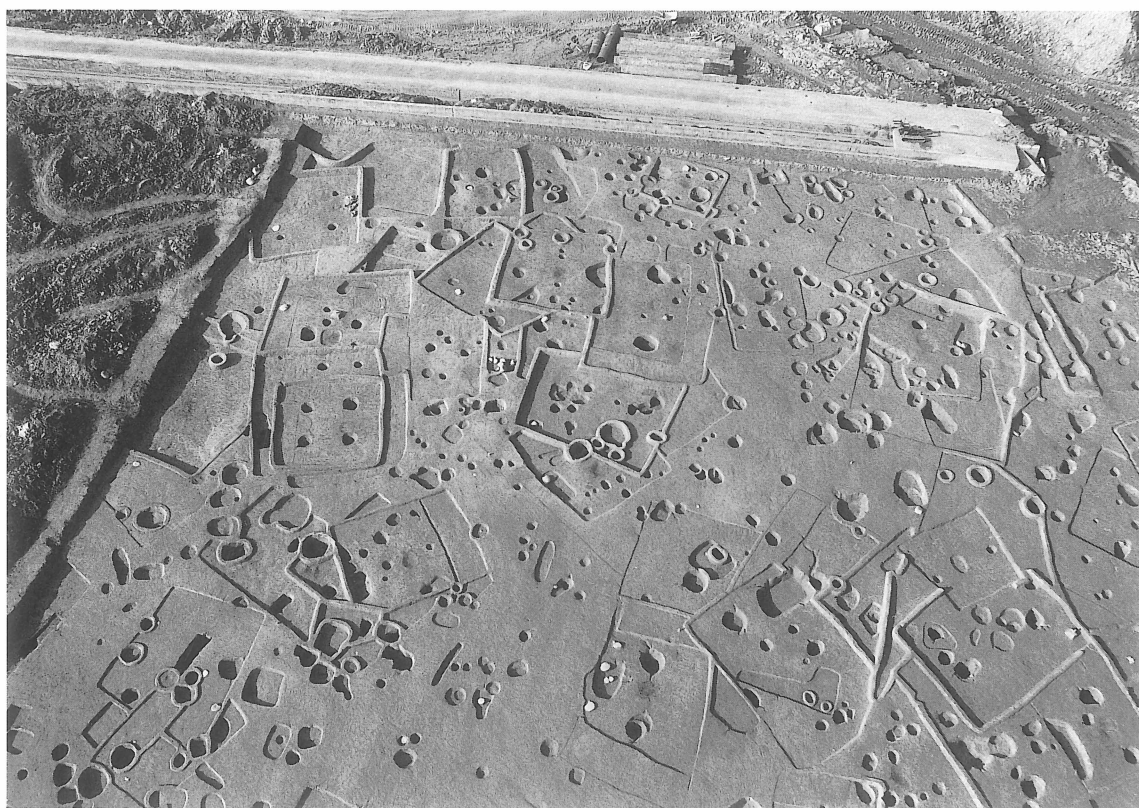
II区全景
(南から)



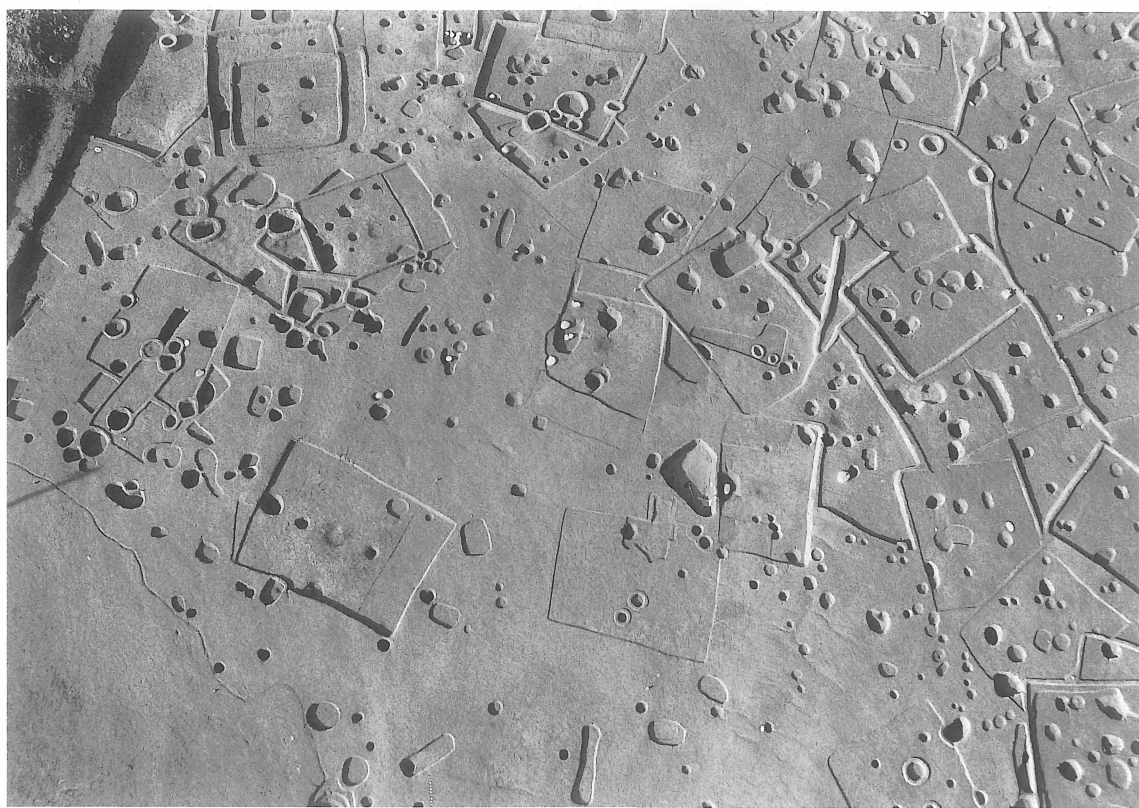
遠景（南西から）



I 区遠景（西から）



I 区空中写真



I 区空中写真



I 区空中写真



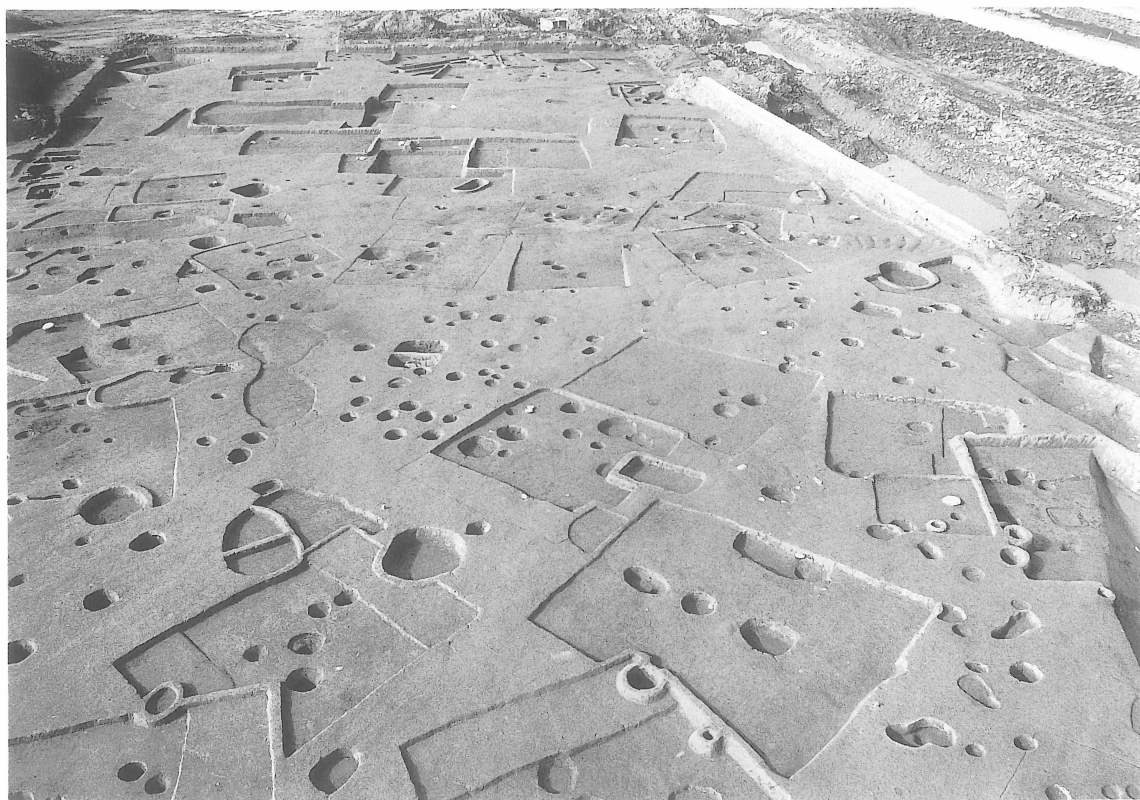
I 区空中写真



Ⅱ区空中写真



Ⅱ区空中写真



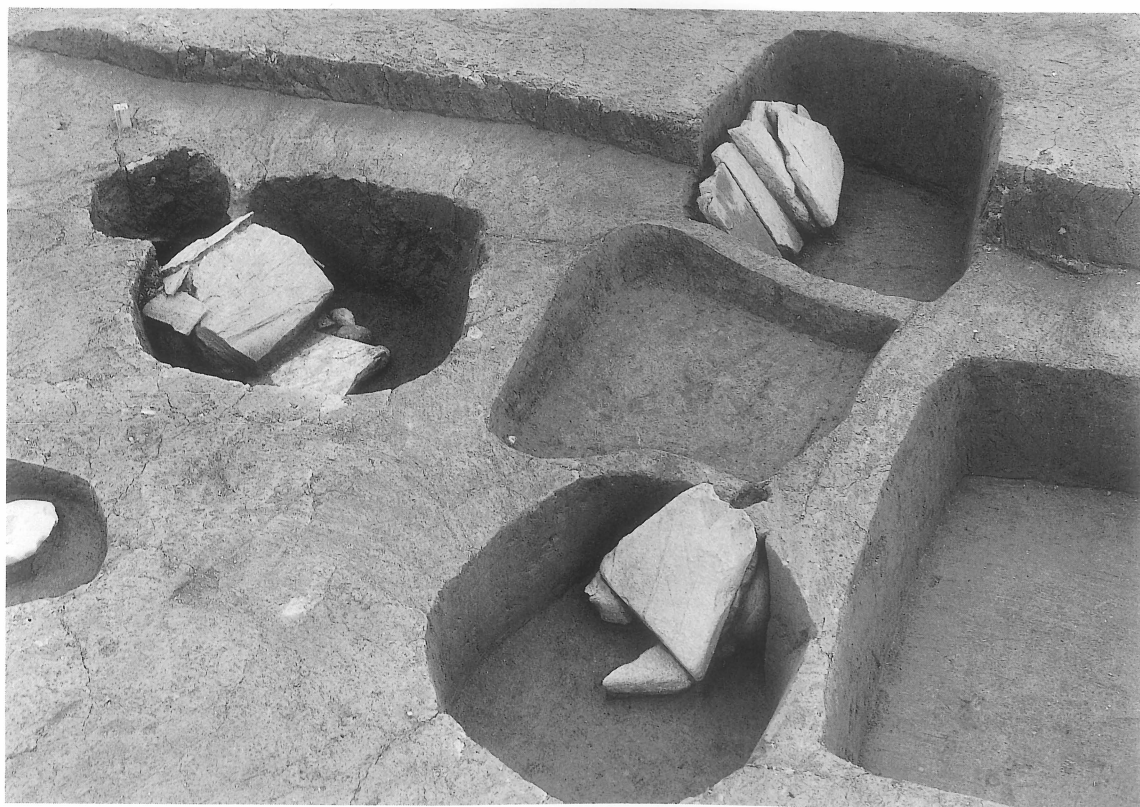
II区空中写真



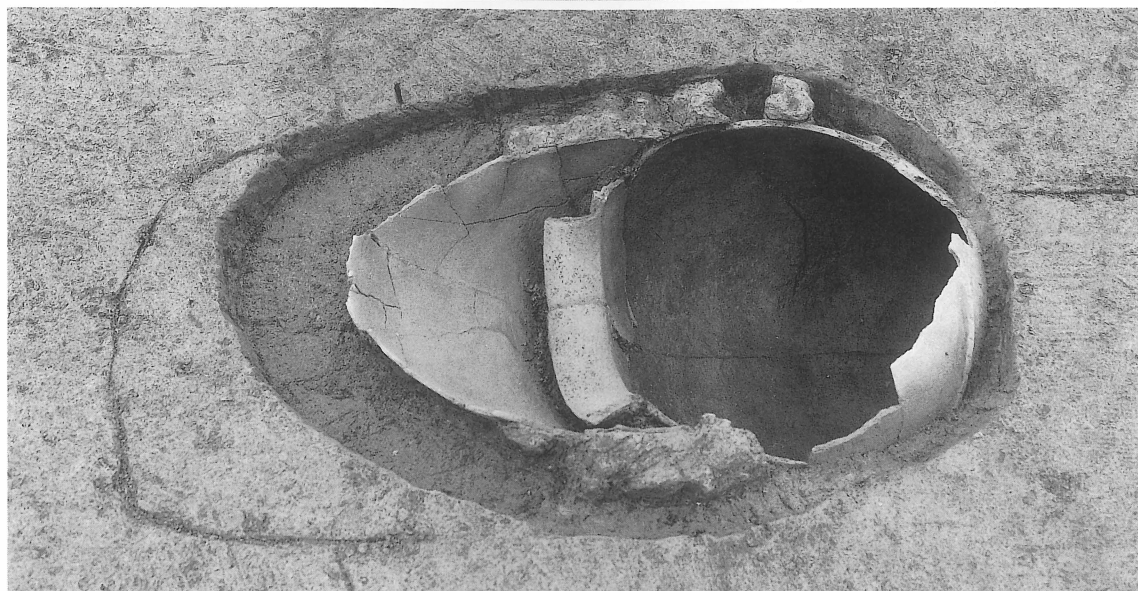
II区空中写真



II区墓地群全景



II区墓地群



II区甕棺墓・木棺墓



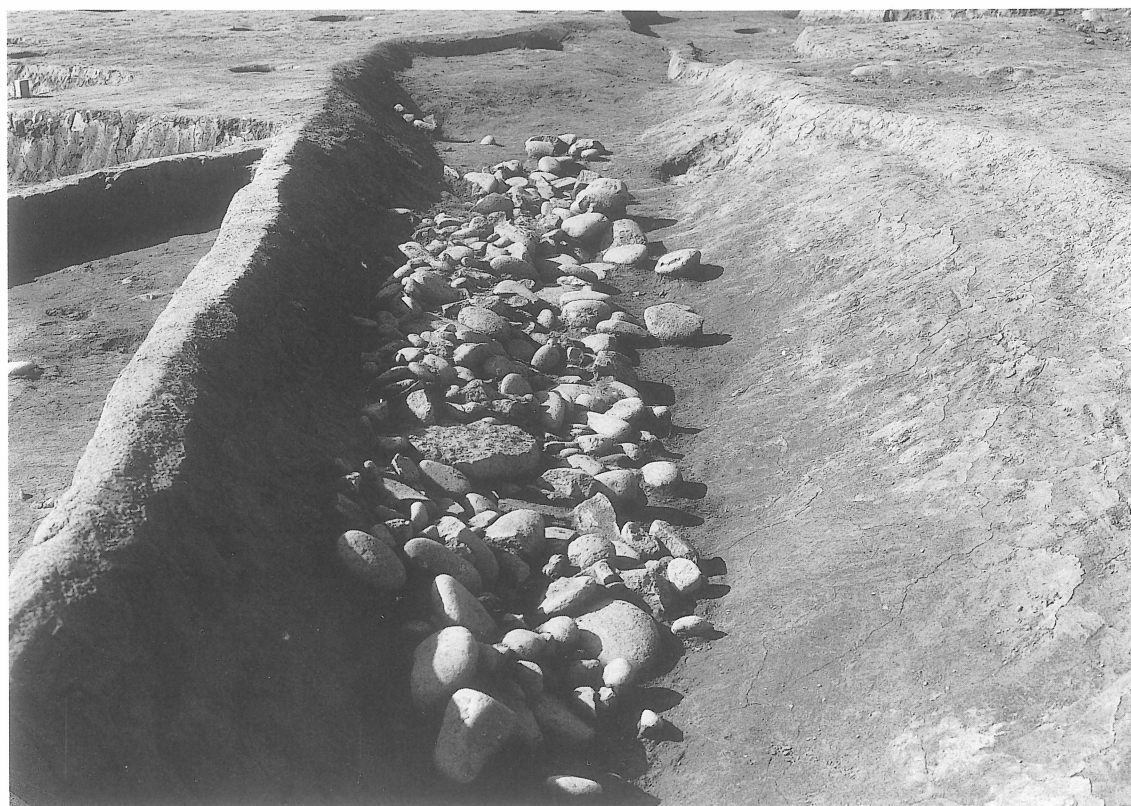
D3



同上



SD206



SD201



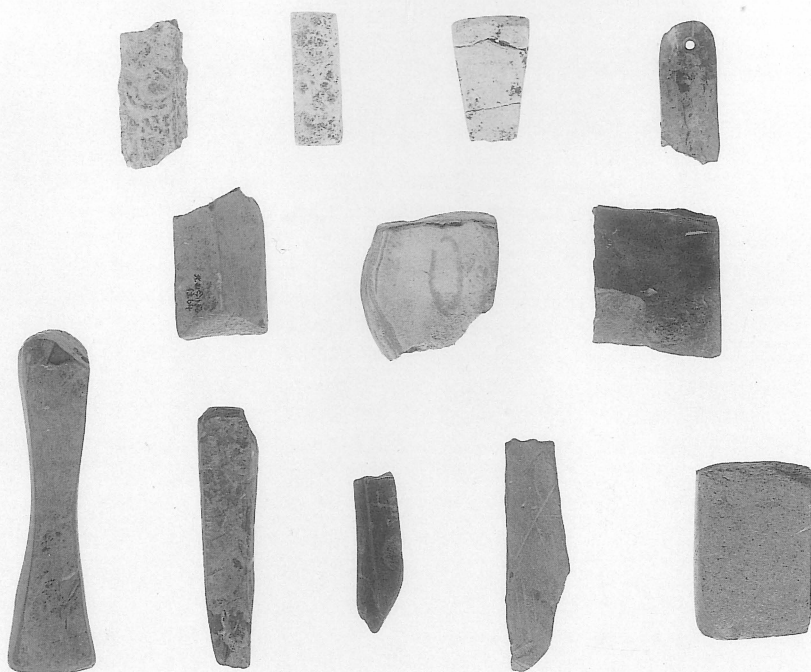
JK 1



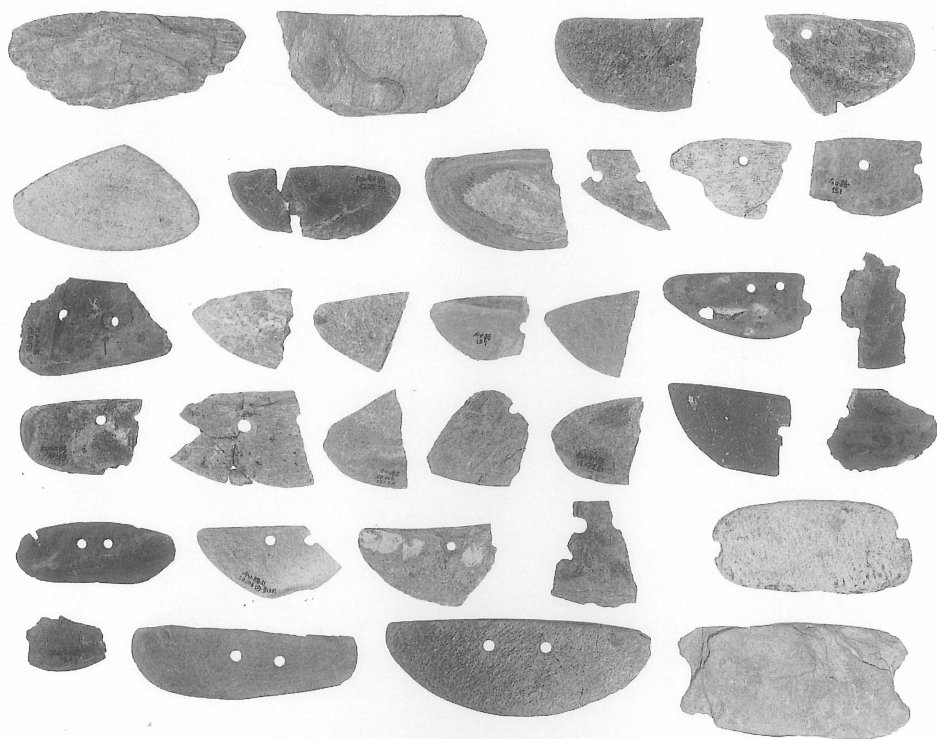
JK 2



出土砥石



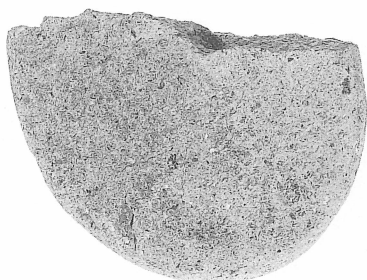
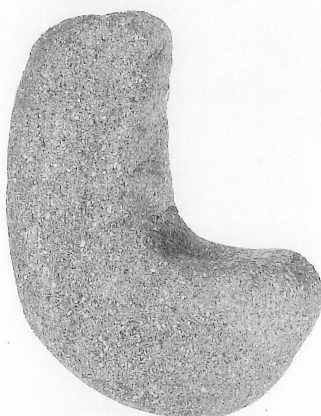
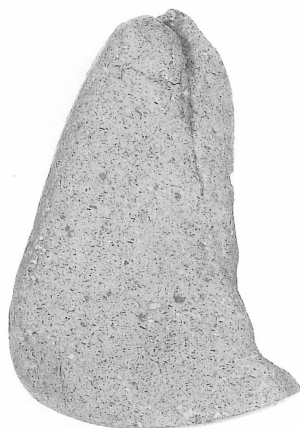
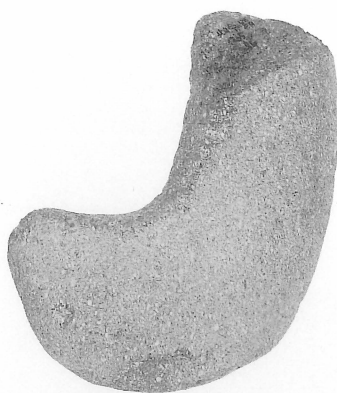
出土砥石



出土石包丁



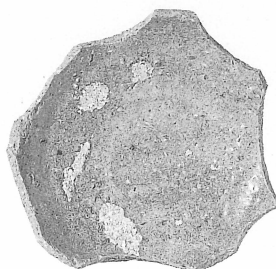
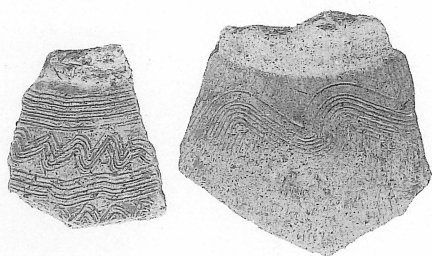
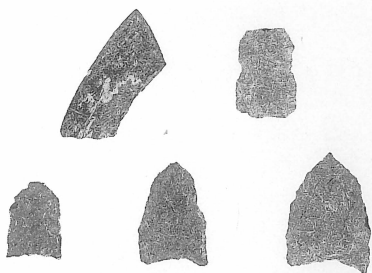
出土石斧



石杵



石錘



立花町文化財調査報告書

第1集	大塚古墳	1984
第2集	曲松遺跡	1985
第3集	鬼隈横穴群	1987
第4集	小倉谷横穴群	1991
第5集	北山小学校遺跡	1993
第6集	北山今小路遺跡	1993

北山今小路遺跡 I

立花町文化財調査報告書
第 6 集

1993（平成5）年3月31日

発行 立花町教育委員会
福岡県八女郡立花町大字谷川1130

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-34
電話 092 (751) 7431